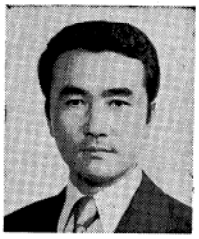
瑞　雲

直方鉄工青年会　　第38号

『互に学び、そして結束を！』

会長　弘　　信之



昨年4月に第18代会長の命を受けたのが、昨日の様でもあり、又、2～3年前の様でもある。歴代会長諸兄もこの様な経験をお持ちであろうと思います。

今更、言う迄もないが、現在、我々鉄工界は過去に例のない程の不況に陥っていますし、この不況がもっと底が深く、その底に向かって滑り込もうとしているのが現状の様です。

会長就任以来、絶えず申し上げている様に、特にこの様な不況の時にこそ、本会事業に参加し、会員相互の意見の交換、情報の収集等を積極的に図る事が、企業の発展、或いは、経営の原点である企業の存続等々本会に求められる唯一のメリットと考えられないでしょうか？。

本年度事業も残り僅かになりましたが、最終事業の『統一地方選挙への参画』へ向かって、全会員の英知と行動力を結集し、不況の鉄工界へ光明を見出そうではありませんか。

会員諸兄の積極的な御協力をお願い致します。

次期新役員決まる

会長	村井武久		
直前会長	弘　信之		
副会長	浅田　毅	〃	石松徹也
事務局長	細田　章	(副)	篠崎光繁
会計	坂田幸一		
監事	内藤博俊	〃	高野浦　篤
〃	内藤　剛		
特別委員会	西尾英治		岩野博之
	吉田幸太郎		渡辺泰輔
総務委	(正) 吉田　一	(副)	田島康宏
広報〃	(〃) 井上　進	(〃)	金谷　保
厚生〃	(〃) 高倉　定	(〃)	吉田裕司
経営〃	(〃) 高原威稜男	(〃)	幸田良一

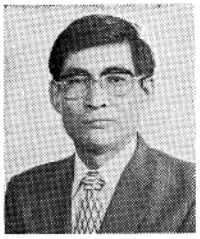
〝会員個々の資質の向上を図ろう〟

《スローガン》 ◦先づ出席！そして参加！

◦一声掛け合い運動

「第七回まつりくらじ」のまとめ

特別委員長　石松　徹也



今回の瑞雲に「まつりくらじ」について、原稿を書くよう依頼を受け、何を書けば良いのか戸惑いましたが、「第七回まつりくらじ」のまとめという事にさせていただきます。

「まつりくらじ」も第七回を迎え知名度もかなり上り、又、運営する人々の輪も次第に拡がっておりますが、反面年々新しい企画も盛り込まれてはいるものの総体的にはマンネリ化しているような気がしないでもありません。

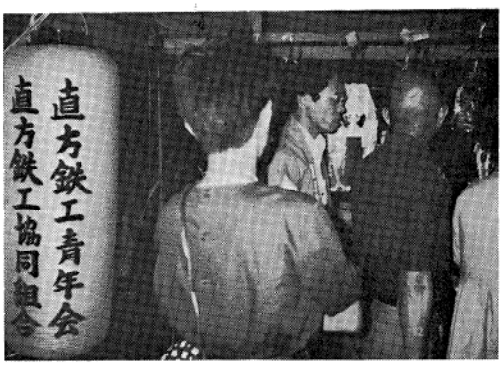
昨年度のまつりは4月末頃から実行委員会が動きだし、何度も実行委員会が重ねられるかたわら、5月末頃からは各部会毎の会議も開催されました。鉄工青年会は一昨年と同様、資金部会長を引き受けて協力することになりました。景気も思わしくない折に会員の皆さまをはじめ、諸先輩の方々や関係企業の皆さまにも、企業協賛金のお願いをし、快く御協力を賜りました事、本当にありがとうございました。

昨年も7月末の日曜日が「まつりくらじ」と予定されましたが、集中豪雨の為、初めて順延され、8月1日に開催されました。冷夏だったとはいえ、子供達の夏休み中のサービスの出来る日曜日に、当日は準備の為、日中から多数の会員の方々に協力をしていただき感謝致しております。

昨年の青年会の出し物は、事務局「綿菓子」、総務「郷土玩具」、広報「アイスクリーム」、厚生「バナナ売り」、経営「ボール遊び」でしたが、当日風が強く、綿菓子作りで身体中ベタベタになりながらの販売や景品がなくなって、何度も街に買出しに出るやら色々のエピソードを残して無事終りました。

収支の決算も初めて黒字決算となりました。収益金と青年会員有志の募金を併せて、長崎水害の義捐金として送りました。当日は鉄工組合の方々や、諸先輩や日頃お世話になっている方々から、励ましの声を掛けていただくやら差入れをいただくやらで、会員全員ハッスル致しました。紙面をかりてお礼申し上げます。

「まつりくらじ」も子供達の楽しみの一つになってきているようですが、全体としては、「見たり」「聴いたり」「買ったり」の部分が多く、「して楽しむ」部分が少いような気がしました。青年会の出し物も子



供達がして楽しむ部分の企画が次年度ポイントかもしれません。

今年の1月末には次年度、いや今後の「まつりくらじ」の運営の輪を拡げる為に直鞍地区の青年が集まり懇親を深めました。弘会長も出席されましたが、多勢の人々の力に支えられている「まつりくらじ」を今後も支えてやらねばならないと思います。

末筆になりましたが「まつり」担当として、1年間皆さまに色々と御迷惑をおかけ致し、多大な御協力をいただきました事に心からお礼を申し上げ、筆を置きます。

誕生おめでとう

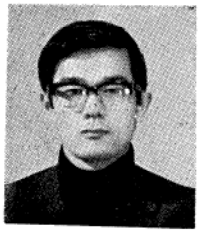
吉田祐司君に初の女のお子さんが、3月10日に誕生しました。名前は有里（ゆり）ちゃんです。体重は3350gでした。

さては、ハネムーンベビーか？

ご家族のご幸福を祈ります。

第2回バレーボール大会

広報委員　松　井　　明



8月18日、広報委員会主催で、第2回鉄工青年会バレーボール大会が開催されました。

バレーボールは、老若男女をとわず、誰でも楽しくできるスポーツはないものかと考え、考案されたといわれます。広報委員会のスローガンが「問題意識を持とう」ということで、この大会に於いて、そしてこの気軽なバレーボールから問題意識をもって、何か得られるものはないものだろうかと考え、約3時間の大会に私は参加致しました。

やはり事を起こす前に、何かを学んでやろうという意欲があれば得られるものです。私はある事に気がつくことが出来ました。バレーボールは大変団体性の強いスポーツで、中国の古典、特に兵法と多いに共通点があるように思えたのです。多人数で攻める・守るの動きがあり、兵隊があり、そして力で戦う勇だけの武将がいて、頭で戦う智将もいる。武将は、みずから考えもなしにあたりかまわずガンガン打ちこもうとするし、又、兵士もそれにつられて、同じようなことをする。兵士の疲労のことなど考えて、配置転換なども考えない。バレーボールの奥を究めたある人の教えだが、「ボールは、ただ力いっぱい打てばいいもんじゃないんだよ。人のいない所に打たなければならないんだよ。僕は試合中に力いっぱい打って、人の顔にボールをあて、それがうまい具合にトスになり、逆に敵から人のいない所に打たれてポイントされたことがあったよ。」

智将は頭を良く使う。試合の何日か前から練習し、守備位置そして転換などを決め、自分たちのチームを知り、又、他チームの情報なども得て、作戦を練って来る。試合の前から違う。練習でうまいところ、団結の強さを見せ、敵を威圧しておいて、本番で相手の畏縮からの失策を待つ。「戦わずして勝つ」とはこのことかも知れない。

バレーボールは、前へ一歩足を運べば受けられるのに、なかなかその一歩が、思うように出ないことが多い。その心理状態をうまくついた智将がいた。強く打つと見せかけて、敵方の武将の前へポトンとボールを落したのだ。バレーボールを愛し、知りつくした智将だった。

「十分を六・七分退かば十分の勝なり。」という思想がある。

広報委員会が3試合目の第2セットを落したのである。それまでは完全な勝利であったが、そこに慢心が生じ気の緩みがでたのか、ボンミスが目立ち落としてしまった。しかしよく立ち直ったものである。チームの雰囲気が変わった。こんなところに兵法抜きの、川筋かたぎのど根性を肌で感じた。「クソー、負けてたまるか！。」

智将武田信玄は「孫子」を愛読し、この中の風林火山の四文字を借りて、旗印にしたということである。又、徳川家康は、つねづね尊敬している源頼朝の「吾妻鏡」を愛読していた。日本の古典だけかと思えばそうではなかった。唐時代の太宗と臣下の対話を記録した「貞観政要」という本を読んでいた。そして臣下の進言によく耳を傾けたということである。

中国古典は、戦術すなわち現代でいうところの経営戦略に多いに役立ちそうで勉強したいものであるが、奇策やうそが多いので使い方をあやまったら、悪い人間のレッテルを貼られそうである。商売に詐術を弄することなく、誠実な商売をするよう心掛けたいものです。

バレーボール大会は、おおかたの予想を裏切って、広報委員会の勝利で終った。1セット落としただけの4勝0敗である。敵も知らず、己をも知らず、よく全勝優勝できたものだが、無欲の勝利である。ひょっとしたらこれは、日本の兵法・・・？

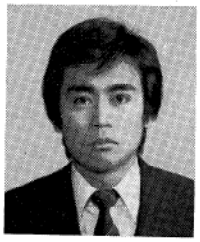
尚、当日の対戦成績表を次ページに記載しています

〔当日の成績表〕

	役員	総務	厚生	経営	広報	勝敗	順位
役員		○ 2－0	○ 2－0	○ 2－0	● 1－2	3：1	2位
総務	● 0－2		● 0－2	● 0－2	● 0－2	0：4	5位
厚生	● 0－2	○ 2－0		○ 2－1	● 0－2	2：2	3位
経営	● 0－2	○ 2－0	● 1－2		● 0－2	1：3	4位
広報	○ 2－1	○ 2－0	○ 2－0	○ 2－0		4：0	優勝

自衛隊体験入隊記

経営副委員長　篠　崎　光　繁



10月2日土曜日、自衛隊飯塚駐屯地正門前に集合した弘会長以下青年会の精鋭8名、早速係員の方に宿舎に案内され制服に着替え宿舎横の広場に整列した。係員の方から教官の紹介を受け、これから先の予定及び諸注意を受ける。見るからに厳しそうな教官である。悠然と構えているのは我らが委員長花田氏くらいで、与古光君あたりは、小便でも洩らすかのようである。その他各人複雑な表情のまま早速訓練に入った。

午前中は、基本教練、停止間の動作である。一番決まっているのが山本監事、だてに年はとられていないようである。昼食をとった後、体力測定。これにはさすがの教官もびっくりされていたようだった。「あなた方の年令でこんな立派な成績をあげられたのは今迄例がありません。」とほめられ、やっと面目を保った感じである。夕食をとった後、教官と共に隊員クラブで宴会である。皆、まさか自衛隊で酒が飲めるとは思っていなかったようだ。窪田さんなんか昼の顔と全然違って目は輝き、本当に嬉しそうである。

翌朝6時に起床、6時半には点呼である。皆眠たそうな顔で宿舎横の広場に整列した。朝食をとった後は体操、隊歌練習の後、付隊班訓練を見学した。隊員の方は皆真剣である。その後指揮法を練習させられた。これは本当に気持ちの良いものである。自分の命令にこれだけの先輩が右に左に動くのである。この時ばかりとわざと泥水の中を歩かせてやった。内心後の仕打ちが恐かったが……。これが終った後教室で所感文を書き、清掃して離隊である。

以上が、おおまかな体験入隊の内容である。

この体験入隊を通して、私は真に平和を求めているのは他ならぬ自衛隊であるということを、初めて認識させられた。

彼等のためにも、何時の日か軍隊を持たないで平和を維持出来る日を強く願って、私の体験記にしたいと思います。

憶えていますか？
青年会の生ぶ声・・・

拝啓　残暑酷しき折皆様益々御健勝の段御喜び申し上げます。

陳者、此の度鉄工界の現況に対処して経営管理の諸問題に関して研究、調査、協議を行い必要事項を企画実践することにより抜本的な体質改善合理化を計り、各自の事業の発展並びに地域社会に貢献すべく鉄工界の若さを結集した鉄工青年会を組織する運びに至りました。

就而その発会を下記の通り致し度いと思いますので、同封会則案抜粋御覧の上振って御参加下さるよう御願い致します。

1.日時　昭和39年9月19日　13時
2.場所　直方鉄工協同組合　2階会議室

殿　　昭和39年9月7日

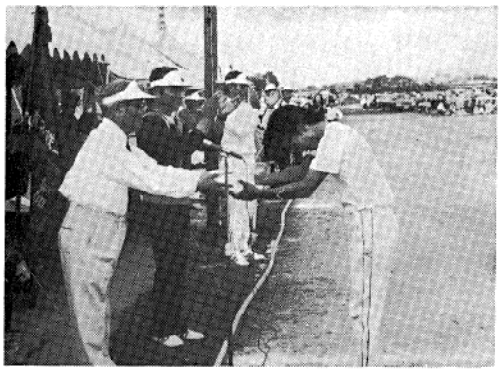
直方鉄工青年会発起人一同

運動会レポート

厚生委員長　村井　昇

１８代直方鉄工青年会、弘会長の本年度メイン事業である、直方鉄工組合主催の運動会が７年ぶりに１０月３１日（日）直方市役所横の河川敷で行なわれた。

森山大会競技委員長をリーダーとして、４ケ月にわたり綿密な準備が進められた結果、参加企業２１社、参加人数、千余名と、大変な盛り上がりを見せた。



心配された天候も、見事な秋晴れとなり、８時３０分より村井直方鉄工組合理事長の、大会挨拶の後、有馬直方市長、坂口県会議員、三原、麻生両代議士の祝辞を頂き競技が始まった。

全員による綱引きをかわきりに、年令別競争、３人４脚と競技は進み、お年寄りを対象にしたゲートボール競技や、拝借競争、幼稚園児、小学生の学年別競争

玉入れ、旗取り、女性だけのパン食い競争、モーレツプレス、企業対抗の百足競争や企業対抗リレーなど、２６種にわたる多種多様な競技が行なわれた。特に予選決勝が行なわれた企業対抗リレーでは、応援席も盛大で、のぼり旗、笛や太鼓を打ち鳴らしての応援は圧巻であった。

和気あいあいとした雰囲気の中、一人のケガ人もなく競技は無事終り、後片付けも各企業で自主的に行なうなど、大変有意義な又、鉄工青年会の団結の強さを新ためて見直した一日であった。

研修旅行レポート

厚生委員長　村井　昇

５７年度研修旅行の目的地を鹿児島に決めたのは、４月に厚生委員長の任命を受けた直後の第１回委員会の時である。

理由は、我々直方鉄工青年会１５周年の際、遠路鹿児島より駆けつけて頂いた、鹿児島機械金属工業団地青年部の当時の会長、稲盛氏への御礼を含めて、表敬訪問したく思っていたからである。

１１月６日（上）ＡＭ９：５５福岡空港発ＴＤＡにて鹿児島へ向い、今回第１の目的地である工業団地へ向った。当団地では組合理事の方３名、青年部会員の方１５名、それに中央会沖田氏他多勢の方々に歓迎して頂いた。

昼食会をはさんでお互いの自己紹介、活動状況、更にこの全国的な不況に対しての対策等、今後お互いの活動及び経営に役立つ様な、活発（？）な意見がかわされアッという間の９０分間であった。

その後大島紬の手織の工程を見学させてくれる、奄見の里を見学、本坊酒蔵での焼酎試飲、磯公園の見学

等かけ足であったが、第１日目の観光を終え宿泊地である城山観光ホテルに到着した。

ホテルのサウナで汗を流した後、鹿児島機械金属工業団地青年部米原、松尾両氏に参加して頂き懇親会が始まった。宴会では、新入会員をはじめ、全員がかくし芸を披露して宴を盛り上げ、この時ばかりは不況をも忘れて、和気あいあいとした楽しい一時であった。

こういう機会を利用して、我々若い会員は、諸先輩方の考え方、経験談等を大いに吸収し、これから先の生き方の参考にすべきではなかろうか。

２日目、７日（日）は、知覧まで足を伸ばし、今から２００年～２３０年前の１８代知覧領主島津久峰公の時代に造られたと云う１０余りの庭園と武家屋敷通りを歩いた。派手さはないが端正な庭を見て落ち着いた気分に浸る事が出来た。

更に知覧特攻遺品館では、出撃に際し「雲流るる果て遙か逝いて帰らざる」と書いた遺詠や遺品、写真等が多く陳列されており、現在の平和な日本に住む私達にとって、激しい衝撃を受けざるを得なかった。

神妙な気持ちのままバスに乗り込み、桜島を経由して鹿児島空港より一路福岡へ向った。

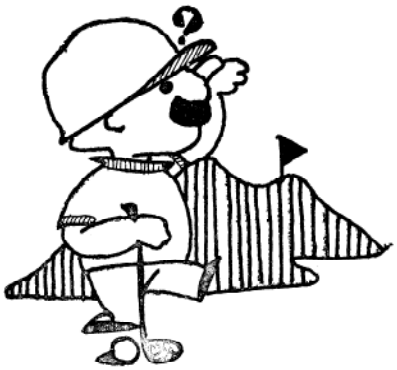
こうして２日間に亘る研修旅行も無事に終り、研修親睦、歴史探索と大変有意義な旅行であった。

最後に私達の研修旅行に際して、御多忙中にもかかわらず歓迎して頂いた、鹿児島機械金属工業団地の皆様方には心より感謝致します。

鉄工青年会
懇親ゴルフ大会

事務局長　西　尾　英　治

第１８代弘会長の指示で年に３回青年会の懇親ゴルフ大会を、事務局で計画する事となり、会長よりカップ贈呈を受け、第１回を６月に庄内カントリークラブで開催。第２回を１０月に開催する予定であったが、運動会、旅行と青年会の行事も多く、１月まで延期して、北九州カントリークラブで開催。第３回は、庄内カントリークラブで３月の１３日に行いました。



この鉄工青年会ゴルフは、上手も下手もなく、楽しく１日遊ぶ事を心がけ、賞品は優勝も参加賞も、あまり差のないようにと心がけて準備しました。

成績は次の通りです。

≪５７年度　１回目≫

優勝	弘	６７	２位	花田　６７

≪５７年度　２回目≫

優勝	山本	７３	２位	村井(武)　７３

≪５７年度　３回目≫

優勝	窪田	７９	２位	田島(悦)　７９

委員会対抗
ボウリング大会

厚生副委員長　与古光　英　明

去る２月１０日鴨生田パークレーンに於て、厚生委員会の主備により、鉄工青年会委員会対抗ボウリング大会が行なわれました。

総勢３２名の参加者を集め、まず村井厚生委員長の大会説明から始まり、弘会長の始球式となりました。その始球のボールは、皆の注目する中でなんとガーターの溝をころがっていくのでした。

一人２ゲームずつを投げ、全員のアベレージでの委員会対抗戦です。１２レーンを借り切って試合が始ま

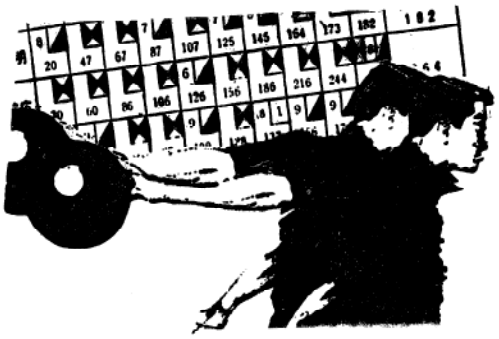
ると、皆、久々のボウリングなのか思った様にボールがころがらなく、日頃持ちつけない重いボールとの戦いが始まっていきました。

そんな中でボウリングは5年ぶりという松井君が、１９９－１６６とハイゲームと個人優勝をさらっていったのです。そこで松井君の談〝ヘッドピンをはずさないようにていねいに投げました。無欲の勝利です〟しかしターキーダブルの１９９はりっぱでした。

その１９９に１ピン差の１９８を出したのが予想外の篠崎君で第２位でした。篠崎君曰く〝１ピンを笑う者は１ピンに泣く〟。また委員会では松井君などを率いている広報委員会がダントツの勝利となったのです

表彰式の後A君曰く〝もしあのスペアーがとれたら２００アップしちょったとに……〟

会長曰く〝もしがあったら誰でも３００出せるとばい〟。その後一竜会館に於て懇親会が行なわれ、皆、いい汗かいた後の酒のうまさに浸ったのであります。



日本のスラング戸籍ノート

スラングは卑語と訳し、また社会語などともいっている。政権や金権に見はなされ、カラダを張って生きている大衆が生み出したスラングは、標準語でもなければ、方言でもなく、全国的に国民大衆の生活語として通用している。シャリのように数千年前の外来語もあれば、インチキのように大正末期の外来語もある。

またその素性はといえば、貴族出身もあれば、僧侶出身もあり、バクト出身もあれば、テキヤ出身もあるというふうに、なまなましい人生の縮図がそこにある

さらにまたその語源をさぐることによって大衆の機知や哀歓を知ることができる。それがたとえ上品とはいいかねる言葉であるにしても、われわれの生活語として日常用いているスラングの語源と意味を知っておく必要はあるだろう。

＊足もとを見る　悪い駕籠屋や馬方が、旅人の、つかれた足もとを見て、高い賃金をふっかけたことから、人の弱点につけこむ意味で普及した。

＊あばずれ　悪場ずれの略との語源説もあるが、コジツケらしい。もと中国で、父母と同列以上の血族関係の老婦人を阿婆といった。これが日本に伝わり、各地に「あば」という方言がある。新潟県や石川県では、適齢期すぎの未婚の女、または女中をさし、青森、岩手、山形、鳥取では、主婦をいう。それにすれっからしの「すれ」をつけたのであろう。

＊油を売る　昔、行灯（あんどん）の油をマスではかり売りした際、しずくのたれるのを、客と話しながら待ったのが怠けるようにみえた。これが語源である。

＊いかさま　大正以後は主として「いんちき」というスラングを使用しているが、それまではもっぱら「イカサマ」といっていた。イカサマ博奕、イカサマ賽、イカサマ師、といったぐあいである。江戸後期の「柳樽」に「お妾の兄はといへば如何様師」とあるように如何様、印ち「いかにもそうだ」と相手に思い込ませておいて、一ぱいくわせるという意味である。

＊いかものぐい　「いかもの」は、「いかさまもの」の中略で、いかにもその物であるように似せた物、まがい物の意。その「いか物食い」とは、正常な食物に対し、人々が食わない毒蛇の血や肉、豚のホーデン、猿の脳味噌、狸のキン玉などのげてものを食うことをいうが、そういう物に動物性ホルモンが多いので、精力補給の源泉ともなる。またあやしげな女をあさるのも「いかものぐい」という。

＊一目おく　囲碁用語で、また「一目も二目もおく」ともいい、自分よりも何かにつけてまさった人に対して、へりくだった気持をあらわす時に使う。碁でいえば、一、二目の相手が技量で接近しているので、双方

一番おもしろい相手である。その他「局面を打開する」「大局を見る」「先手をとる」「後手をひく」「定石どおり」「だめをおす」など、囲碁用語から出てスラング化したものはかなり多い。

＊江戸前　享保ころまで、江戸前といわず、芝肴といったが、江戸が文化の中心になった宝暦以後から江戸前といったのだろう。当時、芝浦から品川付近の磯魚をいったが、近年は、東京湾の東は木更津、館山辺、西は三浦三崎辺までの魚を江戸前という。（直方駅前で江戸前寿司とはこれいかに？）

＊おかぼれ　おかは岡で、見渡しのきく岡から遠望する意。傍観の意である。気心も教養も知れない相手の表面だけを見て、惚れる意味に使われ、水商売の女の専用語に近い。

＊お茶をひく　『嬉遊笑覧』に、「花を見て留守して茶ひく座頭かな」などと貞門の発句をあげ、「茶をば留守居などにひかするならひと見えたり、寂しき体おもふべし」とあるが、昔はひま仕事に茶を挽いた。そこで、つれづれにしてさびしきさまのたとえになり、さらに、水商売の女の、客のない姿に転用された。

＊すけ　テキヤ言葉。「なお助」の略。「なお」はサカサ言葉で、「おんな」をさかさにし、それに助をつけて擬人化したもの。かんじんの「なお」を略し、「すけ」で女をあらわしている。

＊すべた　これは「よみがるた」（めくりかるた）の四枚一組の中の無点札の称呼で、ポルトガル・スペイン語のEspadeのなまりである。花かるたの「かす札」である。『嬉遊笑覧』に、「安永七、八年ごろより、よからぬ女をすべたといふは、かるたより出たることばとぞ」とあるように、今から180年ほど以前にはやりだしたスラングである。

＊せっぱつまる　切羽（せっぱ）は、刀の鍔の両面、柄（つか）と鞘（さや）に当たるところにそえる金具で、刀身をつらぬく長円形の穴がある。切羽がつまるつまり抜きさしならぬたとえである。

＊皮切り　灸の最初の一すえは、なじまぬため、身の皮を切るような痛みを感じるのでできたことば。物事をはじめてするという意味で、最初の行為には、緊張と苦痛がともなう意もふくむ。

＊くだをまく　この語は古く、俳諧の創始者松永貞徳一門の最初の撰集「犬子集」（1633）に、「花見にや酔うてくだまく糸桜」とある。この句でも「くだまく」を糸にからましているが、昔、織物用の原糸を管芯に巻きつける作業を「管巻き」といった。それはおなじ動作を何回もくり返す、辛気（しんき）くさい仕事だったので、酔っぱらいが同じ語をくりかえすのをたとえるようになった。話がていねいすぎて、めんどうなのを、くだくだしいというのも、おなじ語源である。

＊小股が切れあがる　「小」は、語調をととのえ、可憐な感じを出す接頭語。この語は、モモとモモの間が多く切れあがっているのをいう。西鶴の『本朝二十不孝』に、「すまたきれあがりて大男」とあるが、前期上方の長脚長身の形容が、後期江戸の女になると、小股という可憐な表現にかわった。胴長短脚の多い当時ヒップの位置が高く、日本人向きの八頭身の魅力をいった。そこで、江戸前の色っぽい、市井の年増女の美をさした。

＊さくら　仲間を客に仕立てて客寄せをする、その仲間をいう。このテキヤ用語は、明治末期からのものだが、語源不明。パッと咲いて、にぎやかにして、パッと散る。桜の性質によるものか。

＊たくあん　江戸品川東海寺の開祖禅僧沢庵の名を借りた言葉だが、俗説のごとくこの漬物が沢庵の創案ではなく、『俗語考』（1841）のごとく、沢庵の墓石のかたちによったのだろう。ただ、同書の、墓石が大根の漬物に似ているの説はまちがいでその形が漬物のおもしにする、いわゆる沢庵石に似ているからだろう

（自由国民社・ことわざ総解説より抜粋）

【あとがき】　今年度会長方針で、我が機関誌「瑞雲」の発行も年2回と決定し、これなら不慣れで筆不精の私でも、どうにかお役目つとまろうと広報委員長をお引受けしたものの、さて現実は思うにまかせぬ原稿集めで、七転八倒の連続、どうにか本日所期の目的を果し終え、ホッとひと安堵のこの頃です。世の中、不況の風もどこえやら、春には春の自然の摂理が満喫されます。入学、卒業、就職、転勤そして選挙、人々は時の流れにさからわず、毎日を精一杯に生きています。我々も、果てしない不況の波に敢然と立向かい、会長挨拶にありますよう、企業の存在のメリット追求に邁進しましょう！。拙ない委員長ではありましたが、一年間のご支援ご後援を賜りました会員の皆様方に、心から厚く御礼申し上げます。　（舛田記）

発行所	直方市殿町直方鉄工協同組内 直方鉄工青年会　TEL②3241
発行日	昭和58年3月31日
号　数	第38号
編集者	広報委員会（長）舛田浩二
印　刷	大同精版印刷㈱　TEL⑥0878